



「このような不幸な事態に遭遇してしまつたが、こんな時こそ石桜精神を発揮し、全校一丸となつて頑張ろうではないか。」

当時の遠藤貫中校長先生がそう訓辞した。そうだ、これで学校が失くなくなるわけではない。失くなつたのは校舎だけなんだ。これを取り越えて前進しなければならぬ。茫然としている暇なんか無い、と俺は思つたぞ。生徒は静まり返る。

「でもなー、それから毎日三時間の午前授業で早く帰れていがつたなー」

「先生も勉強、嫌いだったんだべ？」

「そ、そんなことは、な、ない…」

私はあわてて当時のエピソードを畳みかけて

逃げを打つ。

「剣道部の吉田長作先生が大事にしていた日本刀は文字通りヤキを入れられ、ヤキが回つた。本来、〃ヤキを入れる〃とは刀を鍛えること。〃ヤキが回る〃とはヤキを入れすぎてダメになることだ。」

(国語の授業に戻りそうだな)と不安気な生徒。

「焼け跡から焼死体が多数発見された。」

生徒の目が丸くなる。

「ただし鳩だ。天井裏が鳩の巣だったのだ。」

鳥目だから逃げ遅れたのだ。」

「ハイハイ」(生徒、あきれれる)

「銀の延べ棒が出て来た。」

「金じゃなくて銀？」

「カップラーメンの自販機(火災の数日前に校内に設置されたばかりだった)の中の百円硬貨が溶けて固まつたのだ。」千何百度という炎熱地獄だったのだ。

「へー」

「脱線したが、火災の恐ろしさが実感できただろう? んじゃ、〇〇、そこ読んでみい。」

「はい。ええと。去んじ安元三年四月二十八日かとよ。風激しく吹きて静かならざりし夜、戌の時ばかり都の東南より火いできて西北に至る。…空には灰を吹きたてたれば火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪えず吹き切られたる炎、飛ぶが如くして一、二町を越えつつ移りゆく…。」

「…ようし。そこまで。」